

「地域と学校の新しいカンケイ」～WIN WIN より Happy Happy～

【9月20日放送内容】

DJ：今回は、武庫北小学校の活動について、武庫北小学校のコーディネーターの田近さんと社会教育課の増田さんにお話をお伺いします。お二方、よろしくお願いします。

田近・増田：よろしくお願いします。

DJ：さて、まずは田近さん。武庫北小学校は、平成29年度に「Happy 応援ネット」（地域学校協働本部）を立ち上げられたそうですね。

田近：そうなんです。コーディネーターは、育友会OBだった縁でお受けしたんですけども、最初、何からどう手をつけたらいいのか全く分かりませんでした。まず手を付けたのが、どんな役割なのかを知らうと、文部科学省や導入自治体のホームページなどを検索しました。その中で、“地域学校協働本部”や“コーディネーター活動事例”をキーワードに検索したのを覚えています。

DJ：そうなんです。コーディネーターとして、地域の方にはどのように協力していただいたんですか。

田近：地域で開催している「福社会議」という会合に呼ばれて、そこで「こんなんでできるよ！」と提案を色々いただきました。コーディネーターをしている私を盛り立ててやろう、協力してあげようっていう、そういう空気感がありました。これは、すごく助かりましたね。

DJ：そうだったんですね。さて、武庫北小学校では4年前から、毎年4月に新1年生の集団下校見守りが行われているとお聞きしていますが、どのように始まったか詳しく教えてください。

田近：分かりました。新1年生は、入学式から給食が始まるまでは3時間目が終わったら、集団下校をしています。それまでは、先生が各地区別に子どもたちを集めて、自宅の近くまで引率をしていましたが、クラス数が少なくなって先生の人数が減っているなかで、通学区域はあまり変わっていないので、引率の先生が足りないということがすごい課題になっていたんですね。

DJ：引率の先生が足りないということ、どのようにして知ったのですか。

田近：コーディネーターとして学校に行っている時に、校長先生や教頭先生とお話している中で知りましたね。みんなと別れた後に、子ども達が帰り方に慣れていないので途中で迷子になったり、保護者の皆さんが心配されるということが発生していることを聞きました。

DJ：なるほど。それで、地域の方々に集団下校の引率をお願いしたということですね。では、どうやって引率してくれる方を探されたのですか。

田近：はい。武庫北小学校の校区には、3つの連協という組織があるんですが、会長さんに協力をお願いすると、「子どもたちの安全のためだったら」ということで、会長さんたちが校区の地図を見ながら、どこの場所に見守りの人が立ったら良いかを考えてくれて、地域の方をお願いをしてくれました。は

じめは打ち合わせも十分ではなかったため、うまく連携した動きが出来ませんでした。次の年には、反省を活かし、お手伝いくださる方々への事前の説明や地域と学校が役割分担をして動けるよう調整しました。

DJ：そうだったんですね。増田さん、いかがですか。

増田：はい。武庫北小学校では、地域と学校が思いを共有して、下校の引率や見守りをされています。

DJ：はい。地域と学校で、どんな見守りにしようとお話されたのですか、田近さん。

田近：見守りについては、2週間という期間があるんですけども、新1年生の子どもたちが自分の力で安全に下校できることを目標にしています。そのために、最初の5日間というのを、先生と地域の方が子どもたちに付き添って家の近くまで送り届けるということをしています。その後については、地域の方が子どもたちの帰ってくるポイントで見守るという感じで、子どもたちに関わっています。

増田：子どもたちが自力で帰れるように、目標を決めることや、学校便りなどでこの取り組みを保護者の皆さんに伝え、そして子どもたちが帰る時間に、できるだけ家の前に立って子どもたちを迎えてほしいとお願いしているところがとっても素晴らしいと思いました。

DJ：うん。本当にそうですね。地域と学校に加えて、家庭も一緒に関わっていらっしゃるんですね。さて、今年は、コロナ禍で活動が非常に難しいと思いますが、工夫していらっしゃることはありますか。

田近：はい。コロナ禍で事前説明会なども開催しにくい状況ですので、事前に下校ルートマップや担当表、注意点などの資料をボランティアの方に配付して、「ボランティアの期間」や「活動していただく時間」、「ボランティアの内容」なんかをわかっただけのように工夫しました

増田：地域の皆さんで子どもたちの安全を守ってくださり、保護者も安心だし、先生方もとても感謝されていると思います。また、学校が最も必要としている支援だと思えますよ。

DJ：そうですね。田近さん、他にはどのような活動をされていますか。

田近：はい。地域の方に集まってもらって、「防災体験会」を行ないました。30名以上の地域の代表の方が参加してくださいました。大災害の発生時には学校が地域の避難所となるので、校門の鍵の開け方やロックシステムの扱い方を教頭先生から説明を受けて、実際に東門と南門の2つの門の開錠を体験しました。

DJ：はい。地域の方が学校の門を開けられることってあるんですか。

田近：そうですね。災害発生時に、校長先生や教頭先生がすぐに駆け付けられることが出来なかったり、すぐに小学校に避難しなければならないような時は、地域の方が預かっている鍵で学校に入ることになります。これまで、鍵は預かっているものの、非常時にどうすればよいか分からない状況でした。

DJ：はい。鍵を持っていても使い方が分からないのはやっぱり困りますよね。また、日頃からそういった訓

練をしていかないと、いざという時にパニックになって対応できないということも考えられますね。

田近：そうなんです。そこで、地域の代表の方々に集まっていただいて、体験会をしようと考えました。門の開け方のほかに、防災に対する意識を高めていただくために、尼崎市の災害対策課の職員から、災害時に開設される「指定緊急避難所」と「指定避難所」の違いや、備蓄や避難所の運営についてのお話や、それから武庫地域振興センター所長によるワークショップを行いました。校長先生から災害時に子どもたちの下校の引率を地域の方にもお願いしたいとお話があり、もっと良い方法がないか、どんな支援ができるかなど意見やアイデアをワークショップの中で出し合いました。

増田：地域が主体的に避難所を運営するための実践的な知識を得ることは、とても大切なことですね。

DJ：このような取組みで地域の皆さんの防災意識が高まり、学校と地域で課題を共有して共に考えていけるようになるんですね。その他に田近さん、どんな活動がありますか。

田近：小学校の校庭の南側に竹林があるんですが、そちらの整備をしました。

DJ：え〜っ！小学校に竹林があるんですか。

田近：そうなんです。阪神大震災の復興事業として、整備された竹林なんです。しかし、整備はしたものの、その後20年間手つかず状態になっていました。ずいぶん前に、子どもたちがたけのこを取ったという記憶があり、うっそうと茂った竹林を学校と地域の方々と協力して、なんとかしようと立ち上がりました。

増田：剪定ばさみやのこぎりなどを、購入されるっていうことを聞いたので、「何が始まるんだろう？」って感じでしたよね。

田近：道具を揃えて、去年の12月初旬に竹の間引き作業をしました。小学校・地域住民・振興センターの3者で竹を切り、間隔をあける作業を行いました。一般的に竹林は、人が傘をさして歩けるぐらいの間隔が必要だそうです。7日間ぐらいをかけてボランティアの方で作業し、ガウ袋に集めた伐採ゴミは、190袋にもなりました。

DJ：けっこうな数ですね。でも、こういった地域のみなさんのおかげで、竹林が蘇ったということですね。また、たけのこが取れるようになるといいですね。さて、武庫北小学校の取り組みをお伺いしてきましたが、田近さんは、地域学校協働活動をこれからどのように広げていこうとお考えですか。

田近：武庫北の校区には「子どものためだったら」と、協力を惜しまない人がたくさんいます。そういう意味では、地域学校協働活動がますます発展できる校区だと思っています。今後、「学校が困っていること」や、「支援してほしいこと」また、「地域がこんなことはできるよ」「こんなことができる人がいるよ」というような情報を共有して、同じ思いをもって子どもを育てていきたいと考えています。また、地域学校協働活動が充実したら、今後、コミュニティ・スクールの設置というのも考えています。

増田：私は、CSディレクターをしています。ディレクターとして、武庫北小学校のコミュニティ・スクールの設置について、いつでも相談に乗りますよ。

D J：やはりそういったサポートが心強いですね。地域と学校が連携した取組をたくさんの方と学校が連携した取組が充実していくといいですね。さて、今回は学校と地域とが連携して、子どもの安心安全を守る武庫北小学校のお話をお伺いしました。田近さん、増田さん、どうもありがとうございました。

田近・増田：ありがとうございました。

D J：さて、来月は「モデル校で実施している尼崎市のコミュニティ・スクール」について、下坂部小学校の杉本校長先生をお招きして下坂部小学校のコミュニティ・スクールの取り組みを増田さんとの3人でお送りいたします。それでは、次回の放送もどうぞ楽しみに。